

「目を見開く」が合図できること

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2021-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大村, 光弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027869

「目を見開く」が合図できること¹

大村光弘

1. はじめに

本稿では、小説でよく見かける慣用表現「目を見開く」を取り上げ、それが非明示的に合図(=指示)するものは何か、さらにその解釈を可能にしているものは何かについて論じる。

まずは、実際の事例である(1)-(4)を順に見てみよう。(1)では、真一が、事件の公判が初回以来ずっと行われておらず、加えて、被告人三人の精神鑑定も実施中だと伝えたと、それを聞いた武上刑事が驚く場面である。ここで「目を見開く」は、武上刑事の驚きを合図している。

- (1) 「三人を分離公判にするかどうかでもモメてるし、向こうが精神鑑定を望んで、今やってるところだから」

武上が目を見開いた。「三人ともかい？」

(宮部みゆき、『模倣犯』上)

つぎに、(2)を見てもらいたい。(2)は、滝壺理后が恋人である浜面仕上の浮気現場を目撃したと勘違いし、怒りを顕わにする場面である。ここでは、「目を見開く」が滝壺の怒りを合図している。

- (2) 彼女は目撃する。己の恋人浜面仕上と、その膝の上に座っている謎の金髪幼女を。……滝壺の眠たそうな瞳が、くわあ！！と見開かれる。そして彼女は無表情で玄関のドアノブを握り潰した。

(鎌池和馬『新約・とある魔術の禁書目録』2)

¹ 本稿は、大村(2020)に若干の修正を加え、さらに第7節を加筆したものである。

(3)でも「目を見開く」は、登場人物(ティッタ)の情緒的反応を合図しているが、今度は恐れである。敗戦の憂さ晴らしを目的にアルサス領にやって来たザイアン・テナルディエが、アルサスを治めるヴォルン家の侍女ティッタを脅し、今まさに凌辱しようとしている。

(3) 腰の剣をザイアンは抜き放つ。

「この俺に対する暴言がどれほど重い罪なのか、身をもって知るがいい」
肩で息をしながら、ティッタは目を見開いた。階段を一、二段後退する。

(川口士『魔弾の王と戦姫』1)

最後に(4)を見てみよう。(4)で用いられている「目を見開く」は、これまでとは異なり、登場人物の情緒的反応を合図していない。(4)において「目を見開く」は、登場人物がある事柄に気づいたことを合図している。

(4) 「これから俺は地下に潜る。京子は倉橋邸に戻るし下手をすればそのまま屋敷に閉じ込められるかもしれない。そうでなくとも、ぴったり監視がつくはずだ。鈴鹿は鈴鹿で陰陽庁に出向けば、拘束される可能性は高い。つまり、もし春虎と夏目が俺たちと連絡を取ろうとすると、その窓口になれるのはお前だけだ」

「一つ！」

冬児の指摘に天馬はハッとして目を見開いた。確かにその通りだ。

(あざの耕平『東京レイヴンズ』11)

このように、(1)-(4)を観察してみると、「目を見開く」という表現が少なくとも4つの異なる事態を指し示すことがわかる。私たちは、小説を読んでいると「目を見開く」という表現に遭遇することがあるが、その都度それがどのような事態を指し示すのかを適切に解釈できる。以下の議論では、それを可能にしている心的メカニズムが存在することを示し、且つ、それがどのように機能しているのかを解明したい。

2. 当該現象の本質

本稿では、(1)-(4)で観察した現象がメトニミー (= 換喩) の一種であると分析する。端的に言えば、「目を見開く」という表現が、目を見開く動作と隣接関係にある別の事柄を指し示すのである。ここでいうメトニミーは、単なる言葉の問題に留まらない。すなわち、世間一般に言うところの修辭的的技巧や言葉の綾という扱いはない。実際、メトニミーは、一般的な認知過程の反映であり、見た目以上に概念的現象である (Goossens (1995), Lakoff (1987), Lakoff and Johnson (1980), Langacker (1993, 2009), etc.)。以下、2.1 節ではメトニミーがもつ概念的側面について、2.2 節では認知的過程としてのメトニミーについて概観する。

2.1 メトニミーがもつ概念的側面

従来レトリックの分野では、メトニミーは言葉の綾もしくは文彩の一種として扱われてきた。たとえば、『ブリタニカ国際大百科事典』には「ある物を言い表す場合に、その物の属性や、それに関連の深い物をもって言い換えて、その本体の物を表す方法」とあり、言語表現のレベルにおける言い換え現象として、純粋に言葉の問題として説明されている。

ところで、日本語には [○+手] の形で「～する人」という意味の表現を作り出す語形成規則が存在するが、この規則では、手が人 (すなわち、部位が体全体) を指し示している。上述の『ブリタニカ国際大百科事典』の定義と照らし合わせて考えると、これはメトニミーの一例ということになる。

- (5) [○+手] の形で「～する人」を指し示す。話し手、聞き手、読み手、書き手、作り手、受け手、騎手、射手、運転手、操縦手など

ここでは、人間を構成する数ある部位の中から「手」を選択し、これを用いて「人」を指し示しているが、「人」を指し示すことができる媒体は「手」だけではない。その証拠に(6)では、「頭脳」が「人」を指し示している。

- (6) その企画を担当する優れた頭脳が必要だ。

それぞれの事例において「手」が「人」と、「頭脳」が「人」と結びついてい

るのには、関連する部位がもつ特定の機能が重要な役割を果たしているようである。たとえば、人間を構成する部位の中から「手」を選択し、それによって「(行為を行う)人」を指し示すとき、適切な指示関係が確立すると同時に、手のもつ特定の機能も暗示される。すなわち、行為を行う為の手段・道具としての「手」である。このように私たちは、手段・道具としての「手」を参照しながら、「(行為を行う)人」に言及しているのである。(6)でも同様に、「脳」という部位を選択し、これを用いて全体である「人」を指し示すとき、適切な指示関係が確立すると同時に、脳が象徴する知性も暗示されている。

もしそうなら、(5)や(6)のようなメトニミーの事例(延いては、大多数のメトニミーの事例)は、単なる言い換えではない²。私たちは、メトニミーを通して世界の有り様を把握するとき、ある実体を、それと隣接関係にある媒体を用いて指し示すと同時に、その実体をこの特定の関係に基づいて概念化しているのである。

つぎに、Lakoff and Johnson (1980: Chapter 8)に従って、メトニミーが言葉のレベルだけでなく概念レベルでも作用することを見てみよう。(7)は、斜体で示した場所がそこに存在する特定の組織を指し示しているという点で、一纏めに括ることができる。すなわち、(7)の斜体部は全て、同じ目的で用いられているメトニミー的代用表現である。さらに、この共有されている目的は、これらの個別的メトニミーに対する上位範疇(すなわち、「場所を用いて(その場所に設置されている)組織を指し示す」として一般化できる。

- (7) a. *The white House* isn't saying anything.
b. *Washington* is insensitive to the needs of ordinary people.
c. *The Kremlin* threatened to boycott the next round of takes.
d. *Paris* is introducing shorter skirts this season.
e. *Hollywood* isn't what it used to be.
f. *Wall Street* is in a panic.

(Lakoff (1987: 77))

² メトニミーが単なる言い換え現象でないことは、既にWarren (1999)によって示唆されている。彼女の言葉を借りるなら、私たちがI like Mozart.と言ったとき、曲のみに言及しているのではなくモーツァルトが作った曲に言及しているのであり、The bathtub is running over.と言ったとき、お湯のみに言及しているのではなく、バスタブに溜まったお湯に言及しているのである (p.128)。

もしそうなら、(7)のようなメトニミー表現は言葉のレベルで個別に生み出されるのではなく、上位概念に当たる概念メトニミーから生み出されている個別の事例ということになる。その証拠に、この種概念メトニミーは汎用性が高く、理屈の上では無制限に応用できる³。

たとえば、Lakoff (1987:77f) は、(8)のような例を挙げてその汎用性を例示している。状況としては、「多くの支社をもつ親会社の経営者が、各支社に対してそれぞれの経営状況を報告するよう指示したが、まだCleveland支社からの報告が届いていない」という設定である。

(8) *Cleveland hasn't reported.*

このように発話者は、即興的文脈 (ad-hoc context) の中でも、「場所を用いて組織を指し示す」概念メトニミーを利用することができる。言うまでもないが、(8)の発話の場に、必要な情報を共有する聞き手がいたなら、その人物は発話者の意図を正しく解釈するであろう。当該メトニミーの汎用性がよくわかる。

最後に、Lakoff (1987) に従って、特定のカテゴリーに関わるプロトタイプ効果 (prototype effects; Rosch (1978)) の観点から、メトニミーが概念に関わる現象であることの更なる論拠を示す。一般的に言って、ある下位カテゴリーが全体としての上位カテゴリーを指し示す (すなわち、前者が後者の典型例となっている) と社会の中で広く認識されているとき、この現象こそがメトニミーによって生じたプロトタイプ効果であると考えられる。関連するメトニミーは、「部分で全体を指し示す (PART OF A THING FOR THE WHOLE THING)」である。この関係にある実例としてLakoff (1987:79-90) が取り上げているのが、母親カテゴリー (mother category) とその成員である「主婦業に従事する母親 (“housewife mother”)」である。アメリカや日本のような社会では、母親は主婦

³ Lakoff (1987) は、概念メトニミーという用語は用いず、「原則 (a principle)」または「メトニミーモデル (a metonymic model)」と表現している。さらに、メトニミーモデルについては、概念Aと概念Bを含む背景知識 (たとえば、組織というものは特定の場所に存在するという背景知識) を伴ったICM (理想化された概念モデル) が与えられると、一方の概念がもう一方の概念を指し示すようなメトニミーモデル (たとえば、PLACE FOR INSTITUTION) が成立することがあると説明している。

Given an ICM with some background condition (e.g., institutions are located in places), there is a “stand for” relation that may hold between two elements A and B, such that one element of the ICM, B, may stand for another element A. In this case, B = the place and A = the institution. We will refer to such ICMs containing stands for relations as metonymic models. (Lakoff (1987: 78))

業に従事しているという先入観や思い込みが存在する。このため、「主婦」と聞いたときに、その主婦が同時に「母親」でもありと咄嗟に判断してしまう傾向がある。これは、上述のメトニミーが作用したことによるプロトタイプ効果と考えられる。

ここで重要なのは、「主婦業に従事する母親 (housewife mother)」は概念として存在しているが、固有の名称が与えられていないということである。「主婦業に従事する母親」という概念が母親カテゴリーの典型例となってプロトタイプ効果を引き起こすということは、当該現象の背後にあるメトニミーが概念間で作用したことを意味する。このように、メトニミーは単なる言葉の問題ではなく、概念レベルで作用する現象であると言える⁴。

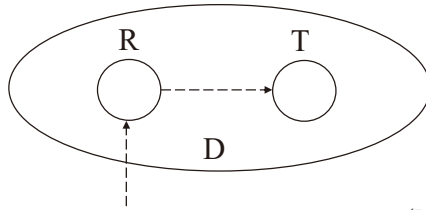
2.2 認知過程としてのメトニミー

私たちは、何らかの理由である対象を把握しにくい場合、それと関連の深い、把握しやすい別の何かを参照点 (reference point) として利用し、本来把握したい対象を把握する。この「何かを目印にしてあるモノを見つける」という人間の認知能力がメトニミーに応用されていると主張する論考に、Langacker (1993, 2009) がある。Langackerは、メトニミーを人間のもつ参照点能力に基盤を持つ認知過程として位置づけている。具体的には、単一のドメイン内で認知的に際立ったものを参照点として言語化し、それと隣接関係にある別のものを目標 (target) として選び出し、それに注意の焦点を向ける過程である。(9)はこの認知過程を図示したものである。

⁴ 瀬戸 (1986: 22f) は、佐藤 (1978) の「換喩は現実世界における隣接関係にかかわり、提喩は意味関係における包含関係にかかわる」という主張に言及し、「類一種」という意味的な包含関係に相当する「全体一部分」関係を提喩 (synecdoche) と定義し、現実世界における隣接関係に基づく換喩 (metonymy) の用法と区別するべきだと主張している。関連してSeto (1999) も参照されたい。一方、Radden and Kövecses (1999) は (提喩を含めた) 全てのメトニミーが概念的であると考えているようだが、この主張の検証は本稿の目的ではない。したがって、本稿の立場としては、概念レベルで作用するメトニミーがあるという程度に留めておきたい。

The use of metonymic expressions in language is primarily a reflection of general conceptual metonymies and is motivated by general cognitive principles. We claim that all metonymies are ultimately conceptual in nature and that many, if not most, metonymies do not even show up in language. (Radden and Kövecses (1999: 18))

(9) 参照点関係



(Langacker (2009: 46))

(9)において、R、T、Dはそれぞれ、参照点、目標、支配領域 (dominion) を意味する。破線矢印は、認知主体 (conceptualizer) が参照点を經由して目標に到達する認知プロセスを示している。

(9)の参照点関係の下でメトニミーが人間の持つ参照点能力の反映だと位置づければ、様々な概念メトニミーを一般的認知過程に還元できるので、学術的な意義は大きい。しかし、まだ不十分である。前節で観察したようなメトニミーのもつ付加的側面も忘れてはならない。前節では、「その企画を担当する優れた頭脳が必要だ。」と言ったとき、知性の象徴である「脳」を用いて「知的で有能な人材」を指し示すことをみた。メトニミーの参照点関係において参照点として選択される表現には、それが選択された理由 (= 経験的動機づけ) が存在する。メトニミーは単なる代用現象ではなく、そこには、参照点のもつ特定の側面と目標を結びつける、経験によって動機づけられた不可視リンクが存在するのである。

3 分析その1：驚きの領域

3.1 驚きを合図する「目を見開く」

(1)において観察したように、「目を見開く」は驚きを合図することがある。この現象は、レトリックの分野でメトニミーと呼ばれる類いの文彩に分類される。関連するメトニミーのタイプは、「顔に表れる運動反応で感情を指し示す (FACIAL MOTOR RESPONSE FOR EMOTION)」とでも言うておこう⁵。いま「文彩」と

⁵ Ekman, Friesen and Ellsworth (1972: 2, note 2) が述べているように、「感情を表す表情 (facial expressions of emotion)」と言うと、心情が顔に表れるという不必要な含意を伴うおそれがある。このことは日本語にも当てはまると思われる。Ekman等の造語はfacial behaviorであるが、彼ら自身も述べているようにこの用語には洗練されていない (awkward) 響きがある。本稿では「顔に表れる運動反応」と表現していくことにする。

いう表現を用いたが、当該現象を単なる言葉の問題に留めておく意図はない。言うまでもないが、既に2節において当該現象が一般的な認知過程として位置づけられることを見ている。

私たちは、「目を見開く」という表現に遭遇したとき、関連する目の運動反応を参照点として、目標となる驚きの情動反応に意識を向ける。では、このとき機能している参照点関係を成立させているものは何か？それは(10)に示したような知識の集合体だと提案する。

(10) 刺激 → 情動反応 (驚き) … 運動反応 (たとえば、目を見開く)

(10)は、驚くという経験を重ねることから抽出された知識の集合体であり、Fillmore (1976) の意味でのフレーム (frame) や Radden & Kövecses (1999) の意味での動作ICMに相当する⁶。ここでは、刺激と、刺激に対する驚きの情動反応(「→」は両者の間の因果関係を示す)に加えて、驚きに付随して生じる(「…」は付随関係を示す)目の運動反応などを含んでおり、全体として驚きの認知領域の一部を成している。

読み手・聞き手は、驚きの動作ICM (= (10)) と文脈から得られる補足情報を利用して、目を見開く動作と驚きの情動反応を関連づける。すなわち、両者の間に参照点構造に基づく指示関係を確立させる。これが、「目を見開く」が驚きを合図するメカニズムである。

3.2 驚きと目の運動反応との間の隣接関係

「目を見開く」がメトニミーによって驚きを合図するとき、これら2つの要素は隣接関係にある。驚きの情動反応と目を見開く動作が隣接関係にあることは、動作学の分野から得られる知見を参照することで信憑性を高めるだろう。

Ekman & Friesen (2003: Chapter 4)によれば、驚きは瞬時にして1回性の感情であり、予期していなかった事態に遭遇したことにより引き起こされるか、または、予期していた事態と異なった事態に遭遇したときに引き起こされる⁷。

⁶ (10)に対して「支配領域」という用語を用いることができる。上位範疇である「認知領域 (domain)」も可能であろう。また、Lakoff (1987)の理想化された認知モデル (Idealized Cognitive Model (ICM))を用いることもできる。本稿の分析は動作学的知見を取り入れているので、Radden & Kövecses (1999)の動作ICMを採用することにする。

⁷ 山根 (2005)は、現象学の立場から、Ekman and Friesenの驚きの情動反応に対する刺激は「意外感」と「驚き」とを混同する通俗的発想であると批判している。山根によれば、「予想に反した

また、人が驚くときには、顔の外観に同時発生的に現れる特徴的変化がある。たとえば、眉が弓なりに持ち上げられる、目が大きく見開かれる、下顎が下がって口が開いた状態になるといった運動反応が観察される。さらに、驚きには尋ねるような驚き (questioning surprise)、驚愕的驚き (astonished surprise)、呆然とさせるような驚き (dazed surprise) といったような程度差が観察され、この程度差が顔の特定部位に見られる運動反応の程度と相関関係にある。

驚きの情動反応と、その同時発生的運動反応である上瞼の緊張と下瞼の弛緩 (すなわち、目を見開く動作) は強固な隣接関係にあるので、これら2つの要素がメトニミーの参照点構造に組み込まれたとしても不思議ではない。このことは言語・文化横断的に生じる可能性を秘めているが、メトニミー用法としてのどの程度慣習化しているかという点に関しては、言語・文化間で違いが見られるようだ。すくなくとも、日本語・日本文化においては、目を見開く動作に着目して (すなわち、これを参照点として) 驚きの情動反応を合図する用法が慣習化しているようである。

3.3 記号化される驚きの程度差

目の動作が驚きを合図するメトニミーとして機能することに関連する重要なポイントは、目を見開くという運動反応が驚きの情動反応と同時に観察されるということであり、この意味で両者が隣接関係にあるということである。この隣接関係を所与として、目を見開く動作が参照点となり、目標である驚きの情動反応を指し示すことが可能となる。

目を見開く動作のメトニミー用法は、驚きの動作ICMを背景として、関連する他の構成要素 (たとえば、驚きの原因や驚きの程度) と容易に関連づけられる。事例を観察しながらこのことを確認してみよう。以下に示した(11)-(13)では、驚きの原因となる対象が記述されており、そこから生じた驚きの情動反応が、驚きの動作表現によってメトニミー的に合図されている。

(11)は、ハンバーガーの配達先がエミリアの父親の住所であることを知って真奥が驚く場面であり、ここでは、驚きの原因 (= 刺激) が記述された後、驚き (= 情動反応) が「目を見開く」によってメトニミー的に合図されている。

時」の典型的な反応こそが「意外感」であり、「驚き」とは区別されるべきものである。「意外感」は刺激そのものに対する反応ではなく、既に解釈された意味に対する反応であるので、「驚き」の反応が終わっても持続することがある。山根の主張には説得力があり基本賛成するものであるが、人間が世界の有り様を現象学的に把握しているかどうかは疑わしい。

(11) 真奥は反射的に届け先の住所と電話番号を確認し、目を見開いた。

(和ヶ原聡司『はたらく魔王様!』12)

「目を見開く」自体には驚きの程度がコード化されていないので、このような事例では驚きの程度が未指定である。

(12)は、タラードが提案する奇抜な戦法を聞いてオルガが驚く場面である。

(12)「そして王都を目指す……ふりをして、エリオットが慌てて戻ってくるのを待ちかまえ、奇襲をかけて叩き潰す。一戦で、終える」

これにはオルガも意表を突かれ、細めていた目を大きく見開く。

(川口士『魔弾の王と戦姫』6)

奇抜な戦法が刺激となり、オルガに驚きの情動反応が生まれる。ここでオルガの驚く様子は、「目を大きく見開く」と表現されている。注目すべきは、「大きく」という修飾語句が目を見開く程度(字義的な意味)を表すと同時に、驚きの程度(非明示的な意味)も合図している点である。すなわち、動作の程度と情動反応の程度との間に相関関係が見いだせるのである。

同じ事が「目を見張る・瞪る」という慣用表現にも当てはまる。(13)は、暗殺目的で現れたオルバがローブの懐から拳銃を取り出したのを見て、エミリアが驚く場面である。拳銃を見たことが刺激となって驚きの情動反応が引き起こされている。さらに、このときのエミリアの驚く様子は、「目を見張る」という表現によって描写されている。

(13)「……早くしろ、今ならエミリアともども葬れる。私はゲート制御の力を残しておかねばならないんだからな」

オルバはそう言うと、ローブの懐から拳銃を取り出したではないか。恵美は目を見張る。

(和ヶ原聡司『はたらく魔王様!』1)

目を見張ることは目を大きく見開くことであり、驚きの程度が比較的大きいことを意味している。ここでも、驚きの程度と、驚きから生じる目の運動反応の程度との間に成り立つ相関関係が、メトニミー表現の中に記号化されている。

4 分析その2：怒りの領域

4.1 怒りを合図する「目を見開く」

概念メトニミー「顔に表れる運動反応で感情を指し示す (FACIAL MOTOR RESPONSE FOR EMOTION)」は、怒りの概念領域にも応用可能である。怒りの動作ICMの中で際立っている顔面部位の動作が採用され、それが参照点として機能することで、怒りの情動反応がメトニミー的に合図されるのである。実際、(2)の例からもわかるように、目を見開く動作は参照点として利用可能であり、「目を見開く」を用いて怒りの情動反応が合図される。

4.2 怒りと目の運動反応との間の隣接関係

目を見開く動作と怒りの情動反応の間の隣接関係を確認するために、再び Ekman & Friesen (2003) を参照してみよう。Ekman & Friesen (2003: Chapter 7) によると、怒りの情動反応は、眉と目と口に特徴が現れる。眉が下がって共に引き寄せられるとともに、眼光が鋭くなる。目が膨らんで見えることもある。口はきつく結ばれるか、開かれて四角くなる。

これらの特徴を見てみると、驚きの表情が主として目を見開く動作と結びついていたのに対して、怒りの表情は、目を見開く動作だけでなく眉の動きや睨みつける行為とも結びついていることが分かる。このことを踏まえながら、(14)-(17)を観察してみよう。

(14) 顔を上げた稲葉は、切れ長の目をこれでもかというくらい見開いて、視殺せんばかりに太一を睨んでいた。

(庵田定夏『ココロコネクト ヒトランダム』)

(15) 「……しつげえよ。いい加減にしろ」

「……………」

つい荒くなってしまった語気に小町が啞然としている。だが、固まっていたのも一瞬のことで、すぐにぶるぶるわなわなと肩を震わせた。そしてくわっと目を見開くと大きな声で言い返してきた。

「……な、なにその言いあ！」

(渡航『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』8)

(16) 部屋に飛びこんできた途端、彼女は驚色の目を大きく見開いた。

「お、おのれ……な、な、なんという破廉恥な……」

(志瑞祐『精霊使いの剣舞』3)

(17) 「じ、実はその、エミリアとはまだこういう話、全然できてなくて……」

「お前なあ！」

どこまでも言い訳がましいライラの返答に、真奥は目を見開いた。

(和ヶ原聡司『はたらく魔王様!』13)

これらの例を観察してみると、確かに、驚きとは違った目の様子が想像できる。「目を見開く」と表現されてはいるものの、文脈から読み取れる目の動作は、目を見開きながらじっと見る、あるいは睨むという行為だと言えそうだ。試しに、誰かが目に怒りの感情を湛えて(あなたを)睨みつける場面を想像されたい。その人の目が物理的にもイメージ的にも、腫れて大きくなっているように見えるのではないだろうか。怒りと結びついた「目を見開く」は、驚きを合図する「目を見開く」とは異なったICMと結びついているにちがいない。この違いを(18)として記述してみよう。

(18) a. 刺激 → 驚きの情動反応… 運動反応(目を見開くなど)

b. 刺激 → 怒りの情動反応… 運動反応(眉が下がって引き寄せられる⁸、目を見開くなど)

(18a)と(18b)はどちらも、刺激から特定の情動反応が喚起されることを表している。そして、それぞれの情動反応には、特徴的な運動反応がリンクしている。「目を見開く」という同じ表現を用いているが、これらは百科事典的なレベ

⁸ 日本語に「柳眉を逆立てる」という慣用語があるように、両眉の内側が下がって引き寄せられ、逆に外側がせり上がる様は、怒りの情動反応として目の見開き動作とともに際立ちを帯びているようである。

(i) エリカの双眸が鋭い光を宿した。目を細めるのではなく、逆に大きく見開かれた両目のまなじりが吊り上がる。

(佐島勤『魔法科高校の劣等生』12)

(ii) 兄の視線の残影をたどり、「まあっ！」と言わんばかりにまなじりを吊り上げる。

「……綺麗女子ですね」

(佐島勤『魔法科高校の劣等生』9)

ルでは異なったイメージ(たとえば、驚きの感情を湛えた目と怒りの感情を湛えた目)を形成していることに注意されたい。

「目を見開く」が驚きを暗示するのか怒りを暗示するのかは、文脈に依存して解釈される。たとえば、(17)では、真奥がライラの言動に苛立ちながら「おまえなあ！」と言っていることから、最も関連性の高い怒りの認知領域が(読み手の心に)喚起される。怒りの動作ICMを所与として、「顔に表れる運動反応で感情を指し示す」メトニミーが適用可能となる。このとき参照点として選ばれるのは、怒りの情動反応に対して他よりも際立ちをもつ項目、すなわち睨みつけながら目を見開く動作である。

5 分析その3：恐れ領域

5.1 恐れを合図する「目を見開く」

(3)の事例が示すように、概念メトニミー「顔に表れる運動反応で感情を指し示す (FACIAL MOTOR RESPONSE FOR EMOTION)」は、恐れ概念領域においても作用する。すなわち、目を見開く動作が参照点として機能することで、恐れ的情動反応がメトニミー的に合図されるのである。このことは、恐れ動作ICMに含まれる項目の中でも、目を見開く運動反応が、メトニミー的指示関係における参照点として機能するだけの資格、すなわち認知的際立ちをもつことを意味している

5.2 恐れと目の運動反応との間の隣接関係

目を見開く動作が恐れ的情動反応と密接に結びついていることは、Ekman & Friesen (2003: Chapter 5) の表情観察から裏付けられる。彼らによれば、人が恐怖を感じているとき、眉と目と口に関して特徴的な運動反応がみられる。眉が引き上げられ、共に引き寄せられる。また、両目が見開き、下脛が緊張する。さらに、唇が後方に引っ張られる。

人が恐れを感じている時の目の運動反応(すなわち、両目が見開き、下脛が緊張する)を言語化するならば、恐れを感じている時の目は「(大きく)見開かれる」と表現することができる。言うまでもなく、恐れ的情動反応と結びついた「目を見開く」は、驚きや怒りを合図する「目を見開く」とは異なったICMの中に現れる。

(19) a. 刺激 → 驚きの情動反応 … 運動反応 (目を見開くなど)

b. 刺激 → 怒りの情動反応 … 運動反応 (眉が下がって引き寄せられる, 目を見開くなど)

c. 刺激 → 恐れ的情動反応 … 運動反応 (眉が上がって引き寄せられる, 目を見開くなど)

(19)において、便宜上「目を見開く」という表現が共通して用いられているが、これらは細部で異なったイメージを形成している。「目を見開く」がどの情動反応と結びつけられるか(言い換えれば、どの動作ICMが喚起されるか)は、文脈に依存し決定される。さらに、特定の動作ICMの読み出しやすさに差があることも言及しておくべきだろう。これは、「目を見開く」の3種類のメトニミー用法の慣習化の度合いに違いがあることを意味している。最も慣習化されている用法は驚きであり、怒りと恐れには有意な差が見られない。詳細については第7節で扱う。

恐れを合図する「目を見開く」は慣習化の度合いが低いので、必然的に文脈からの助けを必要とする。(3)のように、侍女が横暴な貴族に襲われる場面では書き手側も使いやすいし、読み手側も解釈しやすい。

別の例として(20)を見てみよう。(20)は、阿刀冬児が、2年前に起こった霊災テロの首謀者が誰であったか仲間達に伝える場面である。冬児からの報告を聞く大蓮寺鈴鹿は、霊災テロの首謀者が自分の実父であるという事実を指摘されることに、罪悪感と恐怖を感じている。

(20)「そいつの名は、大蓮寺至道。『導師』と呼ばれた国家一級陰陽師であり……
大蓮寺鈴鹿。お前さんの、父親だ」

鈴鹿は一まるで最後通牒を突きつけられたかのように、目を見開いてわなわなと震え出した。

(あざの耕平『東京レイヴンズ』5)

現在の場面設定と「わなわなと震え出した」という描写が与えられると、読み手は、(20)の「目を見開いて」が鈴鹿の恐怖を合図していると解釈できる。とりわけ、「わなわなと」は、寒さや恐怖などから体がぶるぶると震える様を意味しているからである。

6 分析その4：認識の領域

6.1 気づきを合図する「目を見開く」

(4)の事例が示すように、「目を見開く」は、登場人物がある事柄を発見したり、事実認識したりすることを合図することもある。「目を見開く」の指示対象が認識的領域に関わるという点で、この用法は先に見た3種類の用法とは異なっている。概念メトニミーは、「顔に表れる運動反応で認識を指し示す (FACIAL MOTOR RESPONSE FOR RECOGNITION)」とでもしておこう。人がある事柄に気づいたときに、目が(少し)見開かれることがある。この現象を自己経験したり、他者の反応を目撃したりすることによって形成された動作ICMが存在しているのです。私たちは「目を見開く」を通して気づきを合図したり、解釈したりできるのである。

6.2 気づきと目の運動反応との間の隣接関係

目を見開く動作が登場人物の気づき(ある事柄の発見や事実認識)を合図することができるのは、(21)のような動作ICMが存在しているからであろう⁹。

(21) 刺激 → ある事柄の発見や事実認識 … 運動反応(目を見開くなど)

驚き以外の情動反応と同じく、気づきも「目を見開く」と結びつく強度が弱い(第7節参照)。帰結として、気づきを合図する「目を見開く」も、関連する動作ICMを喚起させるに十分な手がかりを必要とする。ここで、(22)を考察してみよう。(22)は、武芸の名門ファーレンガルト公爵家の次女であり風王騎士団の団長でもあるエリスが、カゼハヤ・カミトから褒められたことを自分が内心快く思っている事実に気づいたため、気持ちを引き締めるために己を戒める場面である。

(22) 「カミトは、似合うと言ってくれた……な」

思いだして、思わず頬がゆるんでしまった。

エリスはハッとしたように目を見開くと、両手でピシャピシャと頬を叩いた。

⁹ 小説では、登場人物が特定の事態に気付くとき、その切っ掛けが存在する。この切っ掛けが(21)の「刺激」に相当する。

「わ、私は騎士団長だぞ！私がいかにしなくてはみなに示しがつかん！」
(志瑞祐『精霊使いの剣舞』3)

(22)において、気づきを合図する「目を見開く」は、「ハッとされたように」という修飾語句を伴っている。上述の文脈とこの修飾語句が与えられると、読み手は、「目を見開く」がエリスが自分が浮かれている事実を認識したことを合図していると解釈できる。

別の例も見てみよう。(23)は、サウスレッドモールにある遺跡の入り口を探す冒険部一同が、その場所を見つけるための謎解きをしている場面である。モールに設置されている各自動販売機の裏側に記された数字が何らかの意味をもっていることまでは解ったが、謎解きがそこから先に進まない。そんなとき壱級天災が係員に向かって、解決の糸口になるかもしれない質問をする。

(23)「補充はどういう順番で回っている。この番号が何か関係しているのか？」
天災の質問に、俺たちは「あつ」と目を見開いた。
(鳳乃一真『龍ヶ嬢七々々の埋蔵金』3)

(23)において「目を見開いた」は、冒険部一同が、自動販売機補充の順番が謎解きの手がかりである可能性を認識したことを合図している。ここでも、「目を見開いた」を修飾している「あつ」という表現が、関連する動作ICMの喚起に寄与している。

7 慣習化の度合い

7.1 最も慣習化しているメトニミータイプ

これまで「目を見開く」が驚き・怒り・恐怖といった3種類の情動反応と気づきの認識変化を合図することを見てきたが、つぎに、それぞれのメトニミータイプの慣習化の度合いに目を向けてみよう。慣習化の度合いが大きいメトニミータイプは、他のメトニミータイプと比べて関連する動作ICMが喚起されやすい。このことは、「目を見開く」という表現を目にした(あるいは耳にした)とき、最小限の文脈の手がかりによって、それが関連する心的態度と結びついた運動反応であると判断できることを意味している。それでは、4種類のメトニミータイプ間での慣習化の状況はどうなっているのだろうか？

この疑問を解決するために、「目を見開く」をメトニミー表現として用いている15人の作家を対象として、それぞれの作家の作品中に生起する「目を見開く」の事例数を4種類のメトニミータイプ別に分けて集計してみた¹⁰。今回は、それぞれの作家毎に見られる使用傾向を確認する目的なので、各作家の作品に含まれる語数を厳密に合わせてはいない。しかし、全体としての大まかな傾向も確認しておきたいので、各作家の作品(十数冊分)の総ページ数が概ね3500ページ程度になるように調整することとした。この条件下で、各作家がどのタイプのメトニミー表現を何回使用しているかを調査し、メトニミータイプ間に見られる使用頻度を比較した。表1を参照されたい。

表1 15人の作家の作品に見られるメトニミー表現「目を見開く」の生起数

	使用総数	驚き	%	怒り	%	恐怖	%	気づき	%
作家①	18	11	61.1%	4	22.2%	0	0%	3	16.7%
作家②	67	62	92.5%	0	0%	0	0%	5	7.5%
作家③	79	73	92.4%	1	1.3%	1	1.3%	4	5.1%
作家④	35	32	91.4%	2	5.7%	1	2.9%	0	0%
作家⑤	14	7	50.0%	2	14.3%	5	35.7%	0	0%
作家⑥	50	41	82.0%	2	4.0%	0	0%	7	14.0%
作家⑦	108	87	80.6%	2	1.9%	0	0%	19	17.6%
作家⑧	41	25	61.0%	8	19.5%	5	12.2%	3	7.3%
作家⑨	92	86	93.5%	2	2.2%	0	0%	4	4%
作家⑩	59	54	91.5%	0	0%	0	0%	5	8.5%
作家⑪	12	11	91.7%	0	0%	0	0.0%	1	8.3%
作家⑫	41	37	90.2%	0	0%	3	7.3%	1	2.4%
作家⑬	67	63	94.0%	1	1.5%	0	0%	3	4.5%
作家⑭	13	13	100.0%	0	0%	0	0%	0	0%
作家⑮	32	29	90.6%	1	3.1%	0	0%	2	6.3%
	728	631	86.7%	25	3%	15	2.1%	57	7.8%

¹⁰ 対象とした作家は、庵田定夏、鳳乃一真、大森藤ノ、川口土、桜庭一樹、佐島勤、志瑞祐、竹宮ゆゆこ、手島史詞、東野圭吾、宮部みゆき、むらさきゆきや、米澤穂信、和ヶ原聡司の15人である。また、この順番で表1及び表2の作家番号に対応させてある。

どの作家についても当てはまることは、「目を見開く」が驚きを合図する用法で用いられていることである。さらに、驚きを合図する用法の使用頻度が最も高い。驚きの用法のみが突出していると言っても過言ではない。第2に、驚き以外にどのメトニミータイプを使用するかは作家毎に異なる。第3に、気づきを合図する用法が他の2つの用法よりも若干使用頻度が高いが、驚き以外のメトニミータイプ間に有意な差は無いと言っていいだろう。

以上のことから、4つのメトニミータイプの中で最も慣習化が進んでいるのは、驚きを合図する用法であることが明らかとなった。さらに、この慣習化の度合いが他の3タイプと比較して突出して高いことから、メトニミー表現「目を見開く」は基本、驚きを合図するメトニミー表現であると判断できる。

7.2 目を見開く動作と驚きの情動反応の結びつき

前節で、メトニミー表現「目を見開く」が基本的に驚きを合図することを見たが、このことはそもそも、目を見開く動作が驚きの情動反応と強く結びついていることの結果である可能性が高い。この予測を裏付ける証拠がある。次ページの表2は、前節の調査と同じ範囲を対象として、「目を見開く」が驚き・怒り・恐怖・気づきと結びついて使用されている事例を、メトニミー用法と字義的用法に分けて領域別に集計したものである。字義的用法とは、(25)や(26)の下線部のように、テキスト中に驚き・怒り・恐怖・気づきを表す表現が別途共起しているものをいう。関連する特定の反応が明示されているので、字義的用法の「目を見開く」は動作のみを合図し、登場人物の情動反応や認識的变化を合図しないことに注意されたい。

(25) 強めの風が吹いた。その風を避けるように、永瀬が顔を斜め後ろの方向に向ける。そして視界の端に、太一のことを捉えたようだった。驚愕に目が見開かれた。

(庵田定夏『ココロコネクト ヒトランダム』)

(26) 大沢はびっくりしたように目を見開いて立ち上がった。

(庵田定夏『ココロコネクト カコランダム』)

メトニミー用法であっても字義的用法であっても関連する動作ICMは共通しているので、これら両用法の生起数の和こそが特定の意味領域と結びついた「目

表2 驚き・怒り・恐怖・気づきと結びついた「目を見開く」の生起数

[目を見開く]の使用総数	驚きの表現			怒りの表現			恐怖の表現			気づきの表現				
	メトニミー用法	%	字義的用法	メトニミー用法	%	字義的用法	メトニミー用法	%	字義的用法	メトニミー用法	%	字義的用法		
作家①	11	39.3%	8	28.6%	4	14%	0	0%	0	0%	3	10.7%	1	3.6%
作家②	62	82.7%	8	10.7%	0	0%	0	0%	0	0%	5	6.7%	0	0%
作家③	73	82.0%	9	10.1%	1	1%	2	2%	1	1.1%	2	2.2%	4	4.5%
作家④	32	71.1%	8	17.8%	2	4%	0	0%	1	2.2%	2	4.4%	0	0%
作家⑤	7	21.2%	16	48.5%	2	6%	0	0%	5	15.2%	3	9.1%	0	0%
作家⑥	41	68.3%	7	11.7%	2	3%	0	0%	0	0%	0	0%	7	11.7%
作家⑦	87	62.1%	32	22.9%	2	1%	0	0%	0	0%	0	0%	19	13.6%
作家⑧	25	45.5%	14	25.5%	8	15%	0	0%	5	9.1%	0	0%	3	5.5%
作家⑨	86	72.9%	23	19.5%	2	2%	2	2%	0	0%	1	0.8%	4	3%
作家⑩	54	85.7%	4	6.3%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	5	7.9%
作家⑪	11	68.8%	2	12.5%	0	0%	2	13%	0	0%	0	0%	1	6.3%
作家⑫	37	69.8%	6	11.3%	0	0%	1	2%	3	5.7%	1	2%	1	1.9%
作家⑬	63	86.3%	6	8.2%	1	1%	0	0%	0	0%	0	0%	3	4.1%
作家⑭	13	54.2%	9	37.5%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
作家⑮	29	63.0%	11	23.9%	1	2%	0	0%	0	0%	0	0%	2	4.3%
	918	68.7%	163	17.8%	25	3%	7	1%	15	1.6%	10	1.1%	57	6.2%
													11	1.2%

を見開く」の総生起数となる。それでは、表2の集計結果から分かることを確認してみよう。メトニミー用法と字義的用法の区別無くどの作家についても当てはまることは、「目を見開く」が驚きとの関連で用いられていて、この領域の使用頻度が最も高いことである。さらに、驚きに関連した使用が他の領域に関連した使用と比較して突出していることも、前節の調査結果と符合している。また、「目を見開く」を驚き以外の領域と関連づけるかどうかは作家毎に異なっており、驚き以外を合図する用法の間に有意な差が観察されないことも前節の調査結果と符合するところである。

8 結語

本稿では、「目を見開く」という目の動作を表す表現が、驚き・怒り・恐れといった感情や気づきの認識変化を合図する現象を取り上げ、認知言語学の立場から分析した。具体的には、当該現象にはメトニミーの認知過程が作用していると主張した。関連するメトニミーのタイプは、「顔に表れる運動反応で感情を指し示す (FACIAL MOTOR RESPONSE FOR EMOTION)」及び「顔に表れる運動反応で認識を指し示す (FACIAL MOTOR RESPONSE FOR RECOGNITION)」である。

認知言語学におけるメトニミーは、単一のドメイン内で認知的に際立った項目を参照点として言語化し、それと近接関係にある別の項目を目標として選び出し、それに注意の焦点を向ける過程として捉えられる。たとえば、目の動作を表す「目を見開く」が驚きの情動反応を合図する場合は、目を見開く運動反応が参照点となり、つづいて目標となる驚きの情動反応に意識が向けられる。参照点と目標との間の隣接関係は、関連する動作ICMに基づいて決定される。すなわち、特定の心的態度に関して、関連する動作ICM内で際立ちをもつ関連項目(すなわち、その心的態度と同時発生的に観察される目の動作反応)が、それと隣接関係を形成する。

読み手が「目を見開く」という表現に遭遇したときどの動作ICMが喚起されるかは、関連するメトニミータイプの慣習化の度合いと、物語の文脈から得られる情報の相互作用によって決定される。この慣習化の度合いが最も大きいメトニミータイプは驚きを合図する「目を見開く」であった。さらに、この慣習化の度合いが他の3タイプと比較して突出して高いことから、メトニミー表現「目を見開く」は基本、驚きを合図するメトニミー表現であると主張した。ま

た、このことは目を見開く動作が驚きの情動反応と強く結びついていることの帰結であると主張した。

参考文献

- Ekman, Paul, Wallace V. Friesen and Phoebe Ellsworth. 1972. *Emotion in the human face: guidelines for research and an integration of findings*. New York: Pergamon Press.
- Ekman, Paul and Wallace V. Friesen. 2003. *Unmasking the face: a guide to recognizing emotions from facial expressions*. Rpt. of 1976. Cambridge, MA: Malor Books.
- Fillmore, Charles J. 1976. Frame semantics and the nature of language. *ANNALS of the new York academy of sciences*, volume 280, issue 1. The New York Academy of Sciences: 20-32.
- Gibbs, Raymond W. 1999. Speaking and thinking with metonymy. In *Metonymy in language and thought*, ed. by Klaus-Uwe Panther & Günter Radden, 61-76. Amsterdam: John Benjamins.
- Goossens, Louis. 1995. *Metaphtonymy: The interaction of metaphor and metonymy in expressions for linguistic action*. In *By word of mouth: metaphor, metonymy and linguistic action in a cognitive perspective*, ed. by Louis Goossens, Paul Pauwels, Brygida Rudzka-Ostyn, Anne-Marie Simon-Vandenbergen & Johan Vanparys, 159-175. Amsterdam: John Benjamins.
- Goossens, Louis, Paul Pauwels, Brygida Rudzka-Ostyn, Anne-Marie Simon-Vandenbergen & Johan Vanparys, eds. 1995. *By word of mouth: metaphor, metonymy and linguistic action in a cognitive perspective*. Amsterdam: John Benjamins.
- Grice, Paul. 1975. Logic and conversation. In *Syntax and semantics*, volume 3: speech act., ed. by Peter Cole and Jerry L. Morgan, 41-58. New York: Academic Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire, and dangerous things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George & Mark Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of cognitive grammar* vol.1: theoretical

- prerequisites. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4: 1-38.
- Langacker, Ronald W. 2009. *Investigations in cognitive grammar*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Radden, Günter & Zoltán Kövecses. 1999. Towards a theory of metonymy. In *Metonymy in language and thought*, ed. by Klaus-Uwe Panther & Günter Radden, 17-59. Amsterdam: John Benjamins.
- Rosch, Eleanor. 1978. Principles of categorization. In *Cognition and categorization*, ed. by Eleanor Rosch & Barbara B. Lloyd, 27-48. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Rosch, Eleanor and Barbara B. Lloyd, eds. 1978. *Cognition and categorization*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Sato, Wataru, Sylwia Hyniewska, Kazusa Minemoto, Sakiko Yoshikawa. 2019. Facial expressions of basic emotions in Japanese laypeople. *Frontiers in Psychology*. DOI: 10.3389/fpsyg.2019.00259.
- Seto, Ken-ichi. 1999. Distinguishing Metonymy from Synecdoche. In *Metonymy in language and thought*, ed. by Klaus-Uwe Panther & Günter Radden, 91-120. Amsterdam: John Benjamins.
- Warren, Beatrice. 1999. Aspects of Referential Metonymy. In *Metonymy in language and thought*, ed. by Klaus-Uwe Panther & Günter Radden, 121-135. Amsterdam: John Benjamins.
- 有園智美. 2014. 「〈物事との関与〉」を表す表現の意味の成立: 「手」, 「足」の慣用句. 『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』25-2: 79-95.
- 大村光弘. 2020. 「「目を見開く」が合図できること」. 『The Promising Age (内田恵先生静岡大学退職記念特集号)』31: 1-12. 静岡大学教育学部英語研究会.
- 舩山洋介. 2002. 『認知意味論のしくみ』. 東京: 研究社.
- 佐藤信夫. 1978. 『レトリック感覚』. 東京: 講談社.
- 瀬戸賢一. 1986. 『認識のレトリック』. 東京: 海鳴社.
- 山根一郎. 2005. 「「驚き」の現象学」. 『椋山女学園大学研究論集 (人文科学篇)』36: 13-28.